

社団法人 日本透析医会に期待すること

長谷川 辰寿

長年の願望でありました日本透析医会の法人化達成、おめでとうございます。昭和53年12月2日、第22回透析研究会会場である那覇市において設立説明会が開催されて以来8年8ヵ月の後、やっと公に認められて活動が出来るようになったわけである。昭和53年当時、何のために透析医師の会の設立が叫ばれたのか。あれから10年近く経過した今日、日本透析医会は何をすべきかについて、透析医会ニュースの編集に携わった一員として回顧しながら、希望を述べたい。

わが国における透析医療の本格的な開始は透析が保険診療化した昭和44年頃であろう。

その後、更生医療の適用となった昭和47年頃から患者数は急激に伸びていった。当時の透析医療に携わる医師、看護婦を中心とする医療関係者の努力は想像を絶するものがあった。一つ一つの治療行為が、即ち研究であり、その業務は連日早朝から深夜に及んでいた。那覇市の設立説明会で、現副会長である平沢由平氏は会の組織化を望み、「昭和40年頃でしょうか、何も無いところで、本当の医者良心といえますか、医師としての務めといえますか、若い医者が私達と一緒に毎日徹夜して治療した時期が2~3年続いた訳であります。そういう積み重ねの後、やっと患者が生きられるようになった訳であります。そんな時、保険ができた訳であります。

(中略)

保険が出来て間もなくですが、透析の勉強をするのもいいが、ちょっとおかしい面があるぞ

と心配して、忠告してくれる人がありました。(透析医師に対する社会的批判が)今みたいな状態であれば、今まで情熱をもってやって来たことは何だったのだろうか、大変残念に思うわけです。透析で代表される物質除去治療を進展させるため、研究・治療に打ち込む医師たちにとって、戦意をなくすることのないよう、透析医師の自己規制を包含する会の設立を要望する」と語っている。

透析技術の革新的な進歩のもとで、急激な患者増による透析医療費の増大は社会的な批判を呼び、一部の透析医師による不祥事が、今まで嘗々と透析技術の向上に腐心してきた透析医師全体の行為まで否定せんばかりの不信と無理解の時代でもあった。確かに、当時の透析治療に対する保険診療体制は、透析技術の格段の進歩に対して、出遅れによるところの未成熟の部分があり、一般治療医からも批判的であり、透析医に対する風あたりは強烈なものがあった。

都道府県透析医会連合会はこうした背景の中、昭和54年4月15日に設立、活動を開始し、昭和60年6月15日に名称を変更し、現在の日本透析医会となったわけである。

透析治療のここ10年間の歩みを振り返る時、透析診療報酬問題は別として、透析の技術進歩がもたらした治療の簡便化・透析時間の短縮化は、透析治療を特殊治療から一般治療として位置づけ、かつてのような徹夜診療は解消することになり、関係者にとって大いに福音となった。一方、治療を受ける患者達にとって、この10年

間はどうか変化したのであろうか。技術の向上、透析医療機関の増加に伴い、通院距離の短縮・透析時間の通減化は、患者達にとっても喜ばしい結果をもたらした。しかし、週3回の病院通いの不便さは解消することなく続いているわけであり、透析歴20年近くの透析患者の老齢化の問題・長期透析患者の新たな合併症発生の問題・屍体腎移植数増加の足踏み状態などのデメリットな部分を差し引きすると、患者にとってのこの10年間は、必ずしも、手放して喜べるものではなかったであろう。透析治療の経済的効率が冷え切ってしまった現在、透析治療を受ける患者達の純医学・社会医学上の問題は益々増加し、その対策が迫られている。

日本透析医会の設立趣意書に、1)人工透析療法導入の適性化、2)医療従事者及び患者の教育、3)透析療法の安全性及び有効性向上のための研究・助成、4)合併症患者に対する医療確保支援、5)腎不全対策推進の協力活動の実施が謳われている。これら諸事業は、どれも今直ぐ開始しなければならない事項ばかりである。

日本の透析患者の80%以上を中規模以下の民間医療機関が受け持つという特殊形体の透析医療界において、唯一の公的団体となった日本透析医会の今後の役割と期待は大である。先ず、日本透析医会の諸事業について、内外に公表してもらいたい。次に、日本透析医会の事業を実施するところの組織を磐石なものにしてもらいたい。更に、わが国における透析医療の実体と問題点を把握し、行政とともに、患者の幸せという点で共に語りあえる団体になってもらいたい。特に、早急に解決を迫られている合併症対策に対して、経営効率悪化により、かつての活動力を失っている民間医療機関に代わって、行政レベルの研究体制の敷設運動を展開してもらいたい。

日本透析医会は、昭和40年代において透析医療の確立のため、寝食を忘れ、技術の確立に一

喜一憂した時代のあのエネルギーを、もう一度とり戻すよう、全国の透析医師に呼びかけてもらいたい。

何故なら透析療法、即ち腎不全対策はまだまだ未完成であり、患者が充分満足できる治療に至っていないからである。

日本透析医会の新たな活動に期待する。